されています。

ーご回答　引用の五ー

五、「御洲掘（おすなぼり）」と今に伝わる信仰

前号にも記載しました白馬（神馬）は、平成十六年には山口方面から選ばれて、御陵衣祭の時に、邪気を祓い道を浄める役をつとめたのですが、以前には、この「神馬」が神様の依代である榊を背負って、地御前の家々や田畑を巡ったのだそうです。

社務所の方が指摘されるのは、この点に着目されて「悪しき水、荒き風」をもたらす悪霊を鎮め祓う「御霊会」とは考えられないだろうか。という説です。

「白馬」の巡行というのは、限られた地域ですから、巡行のない地域では、如何だったか。「御洲掘（おすなぼり）というのを、管絃祭に関わって知っておいでになる方や、また、旧佐伯郡沿岸部の地域にお住まいの方で、浚渫（しゅんせつ）（さらう）作業を経験された方もおられるはずです。「特集厳島信仰」（「悠久」№68に前権宮司野坂元臣氏がお書きになった厳島神社管絃祭の中に「御洲掘」の一節があると、ご回答いただきました。

「御洲掘」は、陰暦六月十一日。御池といわれる大鳥居の内の管絃船通御の道筋が、潮流によって寄せられる砂が埋まるので、旧佐伯郡沿岸の各地域の人々が出て、浚渫（しゅんせつ）するのである。早朝から始められた洲掘を終えた地区から手足を洗って神前に進み、家内安全・家業繁栄の御祈祷を受け、榊の小枝と神札が授与される。

この榊の小枝は、田の畔に立てると害虫除けになるとの信仰がある。

ーご回答　引用の六ー

右の「御洲掘」について、榊の小枝を田の畔に立てると、害虫除けになるという信仰は、現在でも受け継がれているそうで、祝詞の中に「悪しき水、荒き風」をもたらす悪霊を鎮め祓うという内容が含まれていることにも通じることがわかります。

ところが、地御前の人々は、厳島の大鳥居の内の「御洲掘」には参加されないとのことで、地御前神社前の「御洲掘」は、宮内地区の方々と共にされる（管絃祭の二日前）のだそうです。

この点につきましては、昨年七月五日(月)に宮島の中央公民館にて、毎月第一月曜の夕方七時から開かれているという歴史講座「宮島ルネサンス」に参加して、拝聴することができました。

その日のテーマが「管絃祭」についての講話で、講師の岡崎　環先生から、興味深いお話しを伺うことができました。

（「御洲掘」は、旧暦六月十一日に行われ、己斐から、大竹までの沿岸の人達が参加し、社殿周辺から大鳥居までの浚渫作業を行っている。しかし、その日は、地御前の人達は参加されないということや、旧暦六月十五日に地御前神社の「御洲掘」が行われる）という内容で、機会があったらこれ等の様子を見ておくと参考になるということでした。

同じく、厳島神社の社務所の方からいただいた記述によりますと（地御前神社前の「御洲掘」を宮内地区の方と共にされますが、その時には、「害虫除け」の榊は配られないのです。何故なら、既に地御前神社祭によって「御霊会」（悪霊の鎮め祓い）が済んでいると信じられていたから――と、推論するのです。）と、学術的な根拠となる文献等の資料に基づくものではないことを述べておられます。

以上のことがらから「地御前神社祭」は、俗称として「御陵衣祭」と呼ばれているが、その原点は「御霊会」から来ていることが理解できますし、改めて祭礼の意味を敬虔な気持ちで受けとめたいと、痛感いたしております。

六、祭はいつ頃から行われていたか。

「御陵衣祭」がいつ頃から行われていたのだろうか。という問いに対しまして、先ず考えられることは、厳島神社を内宮とし、地御前神社を外宮（建物の数は約二分の一、間数では約四分の一で、内宮に比べて小規模）として造営されたのは、六条天皇の仁安年間（一一六六～一一六八年）のころに溯り、平清盛の熱烈な保護に支えられたころが、最も華やかな時代だった<中線／1／　>と、廿日市の歴史探訪(一)の中に、石田米孝先生が記されておられますが、その造営と共に、きっと地御前神社祭は行われて来たに違いないと考えられます。

名称としては、地の御前という社（今川了俊著「道ゆきぶり」一三七一年）即ち地御前社の文字が記されていることは、以前さくらお百二十号に書きましたが、平家が滅亡した後にも（一説には、承久の頃、佐伯郡廿日市櫻尾（さくらお）の城主　藤原親実（ちかざね）、厳島の奉祀を兼ねたりしに、風波のとき渡海ならざるが故に、社を建て、祭礼を行ひしともいう。）